とうふく もんいん　　とくがわ　　かずこ（まさこ）

東福門院（徳川和子）

寛永文化を華やかに咲かせた江戸時代のファッション・リーダーであり、スーパーウーマンと称された皇后・東福門院

徳川家康の孫娘であった東福門院（徳川和子）は、祖父の悲願であった「徳川の血を引く天皇の誕生」を実現するため、わずか14歳で後水尾天皇に嫁ぎました。
将軍の娘として唯一、天皇皇后となった東福門院は、生涯一度も故郷の江戸に戻ることなく、72歳で没するまで朝廷と幕府の架け橋として尽力しました。
また、実子である明正天皇（女性天皇）をはじめ、養子に迎えた後光明天皇・後西天皇・霊元天皇という四人の天皇を育て上げた国母としても知られます。その自由闊達な人柄は日本文化の再興にも大きく貢献し、「寛永文化」を華やかに開花させました。

寛永文化

東福門院の大伯父は織田信長、伯母（淀君）は豊臣秀吉の側室という名門の出身であり、安土桃山時代の一流の美に触れる機会に恵まれていました。その奇抜で華やかなセンスは、後の寛永文化の発展に大きな影響を与えました。後水尾天皇と東福門院は、戦乱の影響で衰退していた宮廷文化の再興に力を注ぎました。とりわけ、宮廷の美意識を高めるために、公家や武家の文化人を積極的に支援し、茶道・香道・華道・和歌・書道など、多岐にわたる芸術文化を奨励しました。これに共鳴した東福門院は、御所のしつらえを一新し、庭園造営や調度品の整備にも関与しました。二人はともに「桂離宮」の改修や「修学院離宮」の造営を推進し、洗練された日本美を体現する宮廷文化の象徴を築き上げました。さらに、東福門院は天皇と共に能や狂言を好み、宮中において盛んに演じられました。このように、東福門院は後水尾天皇とともに宮廷文化の復興に尽力し、江戸時代の貴族文化に新たな息吹をもたらしました。その影響は武家や町人文化にも広がり、やがて元禄文化や化政文化といった後の文化隆盛へとつながっていきました。

茶道

東福門院は茶道を愛し、千利休の孫である千宗旦を御所に招いて茶会を催しました。千宗旦は彼女のために「紅茶巾」や「爪紅台子」などの茶道具を考案し、東福門院はその返礼として、縫絵（押絵）や貝桶などを贈りました。特に「紅茶巾」の創案は有名で、後世の書には「宗旦寂びたりとばかりは言うべからず」と記されています。これは、質素を極め「乞食宗旦」と称されるほど侘びた趣を好んだ宗旦であっても、場に応じて華やかな好みを取り入れることがあったことを示す逸話として語られています。
この関係により、千宗旦は公家社会での茶道の権威を回復し、その後の茶道発展の礎を築くことができました。千宗旦は、祖父・千利休が切腹した影響で仕官できず、一介の町人茶人として暮らしていましたが、東福門院の庇護により、その茶風が宮廷で認められました。この後押しが、宗旦の三人の息子たち（江岑宗左・仙叟宗室・一翁宗守）による表千家・裏千家・武者小路千家の三千家成立につながりました。また、東福門院の影響で宮中の茶の湯文化が発展し、公家や武家、町人の間にも広がりました。彼女の支援が、千宗旦の茶道復興を促し、江戸時代を通じて三千家が確立・発展する基盤を築いたのです。

香道

江戸幕府の公式文書『徳川実紀』には、東福門院が生まれた際、江戸の市中に芳しい香り（異香）が漂ったと記されています。まるで、生まれながらにして香りと深い縁を持つ神秘的な存在であったかのようです。東福門院は、六国五味（香木の分類や鑑賞の基本）の制定に関わった米川常伯（米川流の始祖）に香道の指南を受け、当時の最高水準の技術を駆使した香道具を愛用しました。また、趣向を凝らした複雑な組香を考案し、「盤物」と呼ばれる遊戯性の強い香道具を生み出すことで、香道に新たな楽しみ方を加えました。織田信長の蘭奢待截香に始まり、豊臣・江戸時代を通じて、多くの天皇が香木に銘を付ける「勅銘香」を生み出しました。東福門院もまた香木に銘を付け、「院銘香」と称しました。元来、香道は男性中心の文化でしたが、東福門院の影響により女性にも広がり、その流れは現代の香道にも受け継がれています。

小袖

江戸時代の宮中における正装は「十二単」が基本でしたが、東福門院は「小袖」の普及に大きく貢献しました。彼女には江戸幕府から年間10万石（現代換算で20億円）を超える手当が支給されており、これは当時の皇室の御領収入1万石（現代換算で2億円）を大きく上回るものでした。東福門院は、この莫大な資金を自身のためだけでなく、江戸から同行した女性たちや宮中の女官にも惜しみなく分かち合いました。特に、江戸時代を代表する陶工・日本画家の尾形光琳・乾山の実家である呉服商「雁金屋」を取り立て、京都風のデザインの小袖を発注し、宮中の女性たちに贈りました。
豪華な意匠を凝らした小袖は宮中の女性たちの間で大いに喜ばれ、次第に宮中における日常の装いとして定着していきました。
こうして、宮中のカジュアルウェア（普段着）は「十二単」から「小袖」へと移り変わり、宮廷ファッションに新たな変化をもたらしました。この小袖こそが現代の着物の原型となり、今もなお日本の伝統的な装いとして受け継がれています。

雛祭りと雛人形

東福門院は寛永6年（1629）3月3日、娘の興子（後の明正天皇）の7歳の祝いを兼ねて雛遊びを催しました。これが「雛祭り」の始まりとされています。また、それまで「立ち雛」が主流であった雛人形を、現在のように「雛段」に飾り「座り雛」にしたのも、東福門院が娘のために作らせたものが起源とされています。この革新により、雛人形はより華やかで格式のある飾り方へと発展し、今日の雛祭り文化へと受け継がれていきました。

注記：娘・興子はわずか6歳にして天皇に即位することになり、母・東福門院は、娘が美しい花嫁となり男性と添い遂げることが叶わなくなったことを深く悲しみました。その思いを、夫婦が雛段に並んで座る人形に託したといわれています。

御霊

東福門院（徳川和子）の位牌は、日本に3か所のみ安置されています。天皇家の菩提寺である京都の「泉涌寺」、熊谷直実が創建した「法然寺」、そして江戸（東京）の「築田寺」です。東福門院は、辞世の句「武蔵野の　草葉の末に宿りしか　都の空に帰る月影」に詠まれているように、最後まで江戸の地を偲んでいました。 御霊となった東福門院は、武蔵野の築田寺に戻ってきました。かつて京都御所で彼女が楽しんだ茶会、能楽、香道、華道などの芸能や文化芸術の息吹は、今も築田寺に受け継がれています。

旧きに倣い、今に還る。©2025 千夜賀風

東福門院（徳川和子）の家系図

1336-1573 室町時代

1568-1600 安土桃山時代

1603-1868 江戸時代

織田信秀（尾張（愛知県）の武将）1545-1573 (28)

濃姫（斎藤道山の娘）1535-15?? (??)

織田信長（天下統一）1534-1582 (48)

お市の方（継室）1547-1583 (37)

浅井長政（北近江（滋賀県）の武将）1545-1573 (28)

徳川家康（江戸幕府初代将軍）1543-1616 (73)

西郷局（側室）1552-1589 (53)

茶々（淀殿）（長女・側室）1569-1615 (46)

初（次女・小浜藩初代藩主京極高次の正室）1570-1633 (63)

江（三女・正室）1573-1626 (53)

徳川秀忠（2代将軍）1579-1632 (53)

豊臣秀吉（天下統一）1543-1616 (73)

豊臣秀頼（三男）1579-1632 (53)

千姫（長女 7歳で豊臣家へ）1625-1706 (81)

珠姫（次女 3歳で前田家へ）1620-1674 (54)

勝姫（三女 11歳で松平家へ）1625-1694 (69)

初姫（四女 生まれてすぐ京極家へ）1602-1630 (28)

徳川家光（長男 3代将軍）1604-1651 (47)

徳川忠長（次男 謹慎地（高崎）で自害）1606-1634 (28)

徳川和子（東福門院）（五女 14歳で後水尾天皇に嫁ぐ）1607-1678 (71)

徳川家康の悲願である“徳川の血を引く天皇の誕生”を実現するため、孫娘の徳川和子を後水尾天皇に嫁がせた。

朝廷（天皇家）

幕府（徳川家）

園国子（新広義門院）1624-1677 (53)

櫛笥隆子（逢春門院）1624-1677 (53)

園光子（壬生院）1602-1656 (54)

第108代 天皇 後水尾天皇 1596-1680 (84)

４人の天皇を育てる

第112代 天皇 零元天皇 1654-1732 (78)

第111代 天皇 後西天皇 1638-1685 (47)

第110代 天皇 後光明天皇 1633-1654 (21)

第109代 天皇 明正天皇 1624-1696 (72)

1620年、徳川和子が後水尾天皇のもとに徳川家の二条城から天皇家の御所まで向かう嫁入りの長い行列を描いた『東福門院入内図屏風』
二条城は「徳川幕府」を、御所は「朝廷」を象徴し、その間の行列が両者を結ぶ「架け橋」のように描かれ「公武合体」を象徴的に表しています。

旧きに倣い、今に還る。©2025 千夜賀風